

目次

三宅克己の画業と生涯(四)

― 鐘美術館時代から第一回渡米まで

森 芳功

3

事業報告―シュプレンゲル美術館とのプログラム交流

竹内利夫

31

シュルレアリスム展における
体験的な取り組みと学校等への拡がり

友井伸一
亀井幸子

3

事業報告：シュプレングル美術館とのプログラム交流

竹内利夫

はじめに

筆者は2013年4月にドイツのニーダーザクセン州に滞在し、ハノーファー市内のシュプレングル美術館*を拠点に「美術鑑賞プログラムの交流」事業に取り組んだ⁽¹⁾。帰国後は、当館の講座などさまざまな機会を通してドイツでの活動を紹介してきた。これらの事業のねらいは、美術館教育の分野での人の交流またそこで得られるものを、美術館活動の日常の実践におきかえていくことにあった。その事業経過について報告する。

* Sprengel Museum Hannover (Niedersachsen)

1 計画の経緯

本事業は2007年から徳島県とニーダーザクセン州が交流を進めてきたことを背景に、文化交流事業として実施された。県教育委員会と州政府が意見交換をすすめる中で、2011年11月シュプレングル美術館から県職員招聘の提案があった⁽²⁾。これを受け2012年5月に、県教育委員会から文化の森総合公園の施設6館に対して事業案の募集があり、その結果、当館の提案が採用された。

筆者は現在、当館の美術館教育の事業をすすめる役にあり、鑑賞プログラムの開発や学校教育との連携業務に日常的に参加している。この計画は筆者が1名で訪独し授業体験を試みるものとして構想した。シュプレングル美術館と当館の希望する日程などを調整し、2013年4月14日から23日の滞在となった⁽³⁾。

2 ねらい

本事業のねらいは当館の鑑賞プログラムをドイツで実践することを通して、比較の観点や多文化理解の観点を体験

的に得ることにおいた。以下は日程が最終的に確定した2013年3月時点の出張計画書である。

ニーダーザクセン州との文化交流企画 出張(案)

(1)趣旨

「美術鑑賞プログラムの交流」を目的とし、徳島とニーダーザクセンそれぞれのよさを発見する。実践的な人的交流とし、その内容は文化の森の講座などを通して報告する。

(2)目的と概要

[目的]

実際の授業実践を通して、多文化社会への対応など美術館活動の充実に必要な資質を、体験的に学び、向上させた

[概要]

①授業実践

シュプレングル美術館内か近隣の学校で、児童と美術鑑賞の授業をする。鑑賞の楽しさを交流しながら学ぶ内容とし、美術史や批評の授業ではない。徳島県立近代美術館の鑑賞プログラム「よーいアクション！」などを異文化の中で試してみる。活動は通訳者の協力により行う。

②教育活動の取材など

シュプレングル美術館の紹介により、美術館の教育活動などの調査を行う。活動は通訳者の協力により行う。

③スケジュールなど

4月13日 出発

4月14－15日 シュプレングル美術館内で作品選定などの準備

16－18日 授業実践

19－22日 教育活動の取材など

23－24日 帰国

(3)展覧案

①帰国後の活動

- ・美術館講座で出張の報告会を開催する。
- ・ロビーやWebで報告コーナーをつくり、一定期間継続し

て県民にアピール。

- ・徳島大学国際センター三隅教授とのこれまでの協働研究につなげていく。

②相手とのつながり

- ・互恵的な関係をキープしたい。相手にとって得られることが今回見つければいいが。

多文化交流の研究をテーマとする情報交換など → ロビーやWebで紹介

3 準備・交渉

(窓口)

まずは、2年前に当館に来館したことのあるカーリーナ・ブラート学芸員*に実践案を伝えた。続いて教育・コミュニケーション部門のガブリエレ・ザント学芸員*を窓口相談をすすめた。ザント氏は教育的な面に力点をおいた展示会を手がけてきた研究者である。

(翻訳など)

実践の元となる教材「鑑賞シート」などの語感や授業案のムードが先方に理解しやすいように、いくつかの資料をドイツ語に翻訳して送付した。翻訳者は、徳島県の国際戦略課に相談をもちかけ、マーティン・ラートマン国際交流員*を紹介してもらった。彼は事前に筆者の引率の様子を見学に来るなど熱意をもって取り組んでくれた。同課の紹介でハノーファー在住のトイフェート柴田良子氏*に現地通訳を依頼することになった。徳島大学国際センターのゲールツ三隅友子教授とパートナーのアンドレアス・ゲールツ氏*には、これまで日本語教育の分野で一緒に活動してきた経緯から様々な助言を得ることができた。

(プログラム)

3つのプログラムを候補として提案した。「①よーいアクション!」は絵の前でつぶやきや仕草などを自由に演じる。「②音のかくれんぼ」は絵の中に音をみつけてオノマトペに表す。「③勝手にしんさいん」はお気に入りの絵に自分なりの賞をプレゼントする。いずれも言語表現が苦手な人にも取り組みやすい活動を通して、自分らしい見方を友だちと交流しながら学ぶもので、言葉の不自由な中での交流授業

に適していると考えた。①と②は当館が鑑賞教育推進プロジェクトとして教員らと共同開発した教材。③も日頃から活用しているゲーム感覚のプログラムである。いずれも実践の蓄積があり比較交流にも適している。またドイツに日本ほど多くのオノマトペ表現がなことを知らされていたので⁽⁴⁾、そのような意見交換も期待して「音」の教材を加えた。

(日程など)

出張日程は、学校見学の予定があると確認できた程度で、実際にいつ誰と活動するのは事前にはわからなかった。また「教育活動の取材など」をねらいの一つとして交渉したが具体的な取材先を事前に決めることはできなかった。

* Carina Plath / Gabriele Sand / Martin Rathmann / Yoshiko Teufert-Shibata / Tomoko Gehrtz-Misumi / Andreas Gehrtz

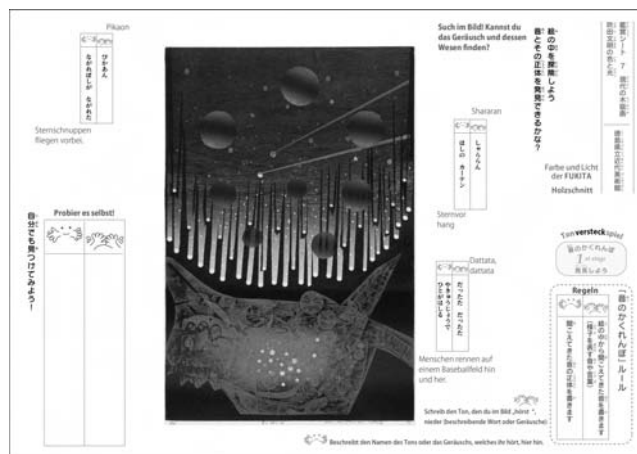




図 事前の交渉や現地での説明に用いた翻訳版の鑑賞シート。および「勝手にしんさい」の翻訳版カードと児童のスケッチ。廃物でできた怪獣の作品に、「いい香りで賞」をプレゼントしている。



図 シュプレングル美術館外観と現地スタッフ。右からザント氏、クラウゼ氏、トイフェルト氏。

4 活動

ドイツでの活動は表の通り移動日をのぞき8日間。4月14日、15日のミーティングで3日間の授業内容を相談し、残り時間で展示室でとりあげる作品や進行の案を準備した。16日から18日の3日間に候補としていた当館の3つのプログラムを全て取り入れることができた。4月22日の学校訪問は18日の授業で一緒に活動した縁で実現した。打ち合わせを含め活動は全て通訳者トイフェルト氏が同行。シュプレングル美術館での授業は、契約エデュケーターのカティア・クラウゼ氏*が担当予定の時間帯に参加しチームティーチングで行った⁽⁵⁾。

* Katja Krause

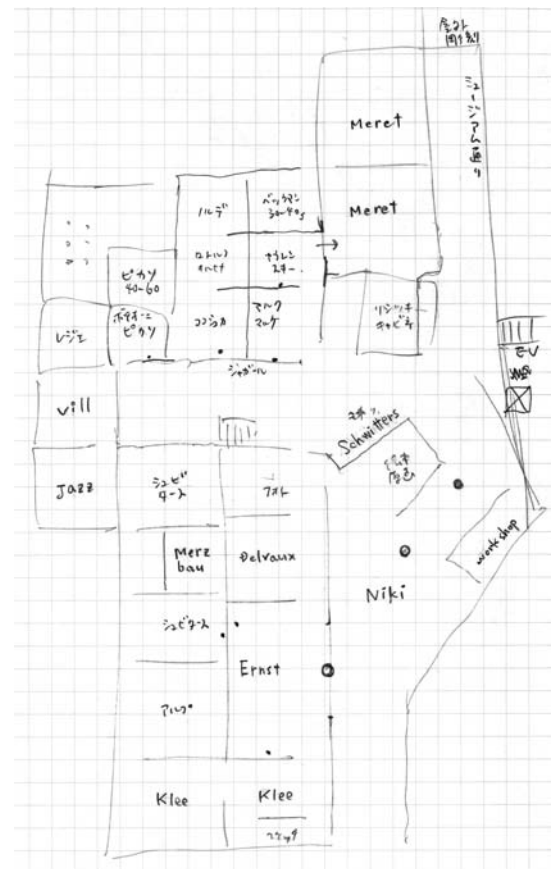


図 引率コースを検討するための館内スケッチ

日程	対象・プログラム	調査等の活動
14日(日)・ 15日(月) 準備、協議		館内で14日はクラウゼ氏と引率の考え方を中心に協議し、15日はザント氏をまじえ3日の候補日の具体案を協議した。
16日(火) 授業1	小学校2年生 「よいアクション!」、 「パオリーネ」	市内にてニキ・ド・サンファルのモニュメント作品「ナナ」を見学。
17日(水) 授業2	中学校ドイツ語クラス (13-16歳) 「音のかくれんぼ」	市内にて歴史博物館見学。
18日(木) 授業3	小学校4年生 「勝手にしんさいん」	市内にて新市庁舎、州博物館見学。
19日(金) 美術館調査、 州政府昼食会		館内で授業作品の記録、キッズフォーラムの見学。館内レストランで昼食会。キュンストラウハウス「ブリアン・ユージェン」展見学。
20日(土) 作品調査		近郊のヘレンハウゼン王宮庭園内のニキ・ド・サンファルの建築作品「洞窟」を見学。 アウグスト・ケストナー博物館の常設展示と、企画展「フード・デザイン」のディスプレイを見学。 州首相府のヒルシュフェルド氏と会談。
21日(日) 美術館調査		館内で授業作品の記録、ザント氏による施設案内。 近郊ウエルゼンのフンデルトヴァッサーによる駅舎を見学。
22日(月) 学校訪問	ボテマ小学校 「音のかくれんぼ」	近郊のシュバルムシュテートに学校訪問。

*Nana / Historisches Museum / Rathaus / Landesmuseum / Kunstverein / Brian Jungen / Herrenhäuser Gärten / Grotto / Museum August Kestner / Food Design / Uelzen / Hundertwasser

1 授業1

日時：4月16日 10:00-12:30

プログラム：よいアクション!、パオリーネ

対象：小学校2年生 基礎学校ヨハナ・フリーゼン・シュレー*
児童23名

講師：クラウゼ、竹内、引率教員のデュリンク、保護者2名
が付き添い。

所蔵作品展会場でシュプレングル美術館の鑑賞プログラム「パオリーネ(Pauline)」を実施。このプログラムは幽霊のトランクにしまわれたガラクタが、どの絵から盗まれたものか自由な発想で探してお話をつくる遊び。冒頭のデモンストレーションを竹内が担当した。グループにわかれ、見つけた絵の前でスケッチとお話づくりをする流れだが、「よいアクション!」にちなんで寸劇をつくる活動にした。約2時間の鑑賞活動の後、キッズフォーラムで幽霊のお絵描きをして相互鑑賞した。

引率教員のナディナ・デュリンク氏*にヒアリング。学校ではできていない活動や鑑賞ができる点がいよとの感想。2年生で初めて見学に来たとのこと。鑑賞の授業は低学年では少ないとも。

(作品図版は会場でのデモンストレーションに取り上げた作品。以下同じ。)

*Johanna-Friesen-Schule / Nadine During



図 アウグスト・マッケ〈大きな明るいショーウィンドー〉1912年
August Macke, Großes helles Schaufenster
“SCHULER AN DER KUNST” 2010 Sprengel Museum

2 授業2

日時：4月17日 9:30-13:00

プログラム：音のかくれんぼ

対象：中学校ドイツ語クラス13-16歳 アダ・レッシング・シュレー(ハウプトシュレー)* 生徒15名

講師：クラウゼ、竹内、美術科教員のミルファステートほか引率教員。

所蔵作品展会場で「音のかくれんぼ」を実施。グループにわかれ、見つけた絵の前でスケッチをするカティア流の活動を加えた。冒頭のデモンストレーションは竹内が担当。約2時間の鑑賞活動の後、キッズフォーラムで自由に絵を描いて相互鑑賞した。

引率の美術教員マリオン・ミルファステート氏*にヒアリング。ドイツ語を話せない生徒たちは恥ずかしがって外出もあまりできないので、郊外から街の中心に出かけてきてこうした活動することは望ましい。竹内のオノマトペは絵を新しい方向から見ていて面白かったとの感想。またクラウゼ氏によれば館のマイノリティ対策は手つかずだとのことで、今後の情報交換について約束した。

* Ada-Lessing-Schule (Hauptschule) / Marion Milferstedt

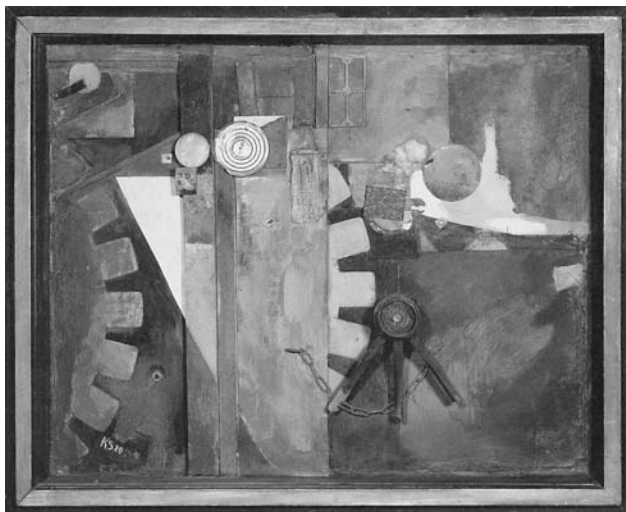


図 クルト・シュビッターズ(メルツ絵画29A)1920年
Kurt Schwitters, Merzbild 29 A
“SCHULER AN DER KUNST” 2010 Sprengel Museum

3 授業3

日時：4月18日 9:30-14:00

プログラム：勝手にしんさいん

対象：小学校4年生 基礎学校ボテマ・シュレー* 児童13名

講師：クラウゼ、竹内、担任のボールス*ほか引率教員。

企画展「ニキ・ド・サン・ファル メシヤン・メシヤン*」会場で「勝手にしんさいん」を実施。冒頭のデモンストレーションは竹内が担当。約2時間の鑑賞活動の後、キッズフォーラムでニキの絵本に登場する怪物や、審査のトロフィー、王冠などを自由に描いたり工作したりして相互鑑賞した。週明け22日の学校訪問を持ちかけたところ快諾してもらえた。

* Grundschule Bothmer / Melanie Böhrs



図 ニキ・ド・サン・ファルの彫像(ドロレス)1966年。
Niki de Saint Phalle, Dolorès
Méchant Méchant
右端はクラウゼ氏。写真提供：シュプレングル美術館

4 学校訪問

日時：4月22日 9:30-14:30

対象：基礎学校ボテマ・シュレー(ハノーファー近郊のシュバルムシュテート*)

ギゼラ・コッホ校長*の案内で、1年生の図工の授業、3年生の宗教の授業を見学。卒業生など地域住民の寄進を理解させるための展示物などを見学。18日に活動した4年生の教室で歓迎を受けた。鑑賞プログラム「音のかくれんぼ」を掛図を使って紹介し、子供たちの意見を聞いた。コッホ校長や英語を担当する担任のボールス氏と連絡を取ることになった。やわらかな発想で絵を鑑賞する「音のかくれんぼ」は初等教育に適していると感じられたようで「勝手にしんさいん」ともどもコッホ校長から好意的に評価された。

* Schwarmstedt / Gisela Koch

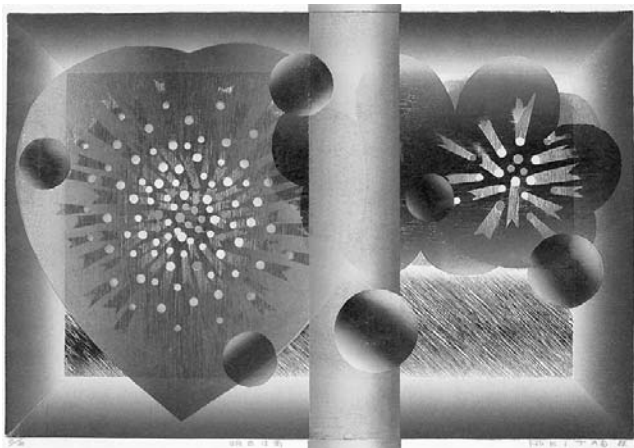


図 吹田文明「明日は雨」1988年

5 調査・会談

日時：4月19日

調査10:00-12:00 シュプレングル美術館展示室で授業に使用した作品の記録、キッズフォーラム(子どものアトリエ)の見学。

会談12:00-14:00 ハノーファー市の昼食会(於シュプレングル美術館)。クレンベル館長*、州首相府ヒルシュフェルド氏*、州文科省ノイバート氏*へ、学芸員ザント氏と竹内から今日までの活動を紹介。実践的な共同授業を交換した様子に関心が寄せられた。ゲストに留まらない能動的な活動を行った点は好意的に評価された。将来的な交流のアイデアについて意見交換するよう求められ自由に歓談した。少点数の交換展示と教育プログラムを合わせて交流する案、シュプレングル美術館の改築に時期を合わせて貸出などをする案、博物館など多分野で交流する案、などの話題が出た。交流の継続に努めるよう依頼された。

*Ulrich Krempel / Mattias Hirschfeld / Kurt B. Neubert

6 調査・視察

日時：4月21日

調査10:00-12:30 シュプレングル美術館展示室で授業に使用した作品の記録。

視察12:30-14:30 学芸員ザント氏による施設案内。収蔵庫や工作室など大規模な施設の説明、改装計画、学校対応などの様子について説明を受けた。ザント氏企画による教育展示の資料などについて説明を受けた。

5 事後の展開等

1 報告会

(1) きんぴセミナー「ドイツ紀行 美術館とこどもたち」

2013年7月21日 14:00-15:30

講師：竹内利夫(展示室での活動は亀井幸子主任)

ゲストスピーカー：ゲールツ三隅友子(徳島大学国際センター教授)、アンドレアス・ゲールツ(ドイツ語教師)

ビデオによる出演：マーティン・ラートマン(徳島県国際交流員)

場所：徳島県立二十一世紀館多目的活動室、徳島県立近代美術館所蔵作品展会場

対象：一般69名

一般に向けての派遣事業の成果報告と、多文化理解に関心を持つ人へのアピールをかねて、日本JTMとくしま日本語ネットワークに呼びかけて、日本語教師と日本語を学ぶ子どもたち、保護者らの参加を得た。筆者の講義と並行して、展示室では亀井主任の引率により鑑賞プログラム「シーがる・た」を行い、日本語を学ぶ子どもたちが各自の語学力に応じたカルタを書いた。その後、講義の会場で合流して掛図を使ってカルタのあてっこ遊びを楽しんだ。その後、パオリーネも体験した。



図 会場の掛図を使ってパオリーネをしている様子。

(2) ロビー展示

2013年7月26日設置

場所：徳島県立近代美術館2階ロビー

4月のドイツ派遣について7点のポスター展示により紹介。4月18日のボテマ・シュレーの授業の中で制作された生徒作品、6月1日のこども鑑賞クラブで制作された幼児・児童の作品をあわせて展示。



図 ロビーの様子。

2 講座

(1) こども鑑賞クラブ「所蔵作品展『新収蔵』の巻」

2013年6月11日 14:00-14:45

場所：徳島県立近代美術館所蔵作品展会場

対象：小学生ほか19名

4月16日のヨハナ・フリーゼ・シュレーの授業の中で体験した鑑賞プログラム「パオリーネ」を徳島流に実践した。シュプレングル美術館のトランクをまね、鉱石やカップの他、扇子など和風のがらくたをそろえて、「ヤッピーネをさがせ!」とうたって活動した。ヤッピーネとはヨハナ・フリーゼの子どもたちと意見交流する中で、男子児童がドイツ語の「ヤパン(日本)」にちなんで命名した、「当館に住む幽霊」の名前。

(2) 徳島県中学校美術教育研究会

2013年6月15日 12:30-13:30

場所：徳島県立二十一世紀館会議室、徳島県立近代美術館 特別展会場

対象：中学校美術科教員42名

ドイツでの中学生との関わりを中心に派遣中の活動を紹介。展示室に会場を移して、ドイツで行ったドラマ風の活動を教員らに体験してもらった。

(3) 日本語指導者養成セミナー

2013年9月21日 9:00-12:00

場所：ヒューマンワークびあ徳島

対象：日本語指導者33名

JTMとくしま日本語ネットワーク主催による、文化庁委託平成25年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業における「日本語指導者養成セミナー」の一貫として、ゲールツ三隅友子教授担当の「日本語支援のための異文化理解と外国語としての日本語」の一部を分担。美術教育に関する講義と体験学習指導として、ドイツでの活動を紹介。

(4) その他(依頼講座の中で紹介)

① 福井大学教育地域科学部美術サブコース

2013年10月25日 8:30-10:15

場所：福井大学

対象：学生ほか6名

濱口由美准教授の依頼により「美術鑑賞学習の協働実践研

究会―鑑賞詩ワークショップづくり」事業の講義を担当。美術教育に関する講義と体験学習指導として、ドイツでの活動を紹介。

②第2回鑑賞ツアーガイド育成講座

2014年2月15日 16:00-18:30

場所：沖縄県立美術館講座室

対象：NPO法人沖縄県立美術館支援会hapメンバーほか17名

平成25年度沖縄文化活性化・創造発信支援事業「鑑賞ツアーガイド育成事業」の一貫として、NPO法人沖縄県立美術館支援会hapの依頼による講座を担当。美術教育に関する講義と体験学習指導として、ドイツでの活動を紹介。

3 報道

以下の新聞記事においてドイツへの派遣また帰国後の実践について紹介された。筆者による記事は文化部の依頼により投稿したものが掲載された。

廣井和也「独の子どもに美術鑑賞の授業」徳島新聞 2013年4月9日 社会面

加藤美穂子「美術に関する懸け橋に ドイツ派遣で子どもに授業」毎日新聞 2013年4月11日 徳島版

(無署名)「近代美術館竹内さん独で鑑賞のコツ指導」読売新聞 2013年4月11日 徳島版

(無署名)「ひと@人 独・NS州との懸け橋に」産経新聞 2013年4月27日 徳島版

竹内利夫「ドイツで武者修行 上・下」徳島新聞 2013年5月21日・22日 文化面

笠井理「『こども鑑賞クラブ』10年」徳島新聞 2013年6月4日 夕刊

4 ドイツとの交流

一緒に活動したクラウゼ氏、学校へ訪問して交流をあたためたボテマ小学校とはメールでの意見交換が続いた。不慣れな英語のメールを介しての対話ではあったが、滞在中のできごとを理解するために役立ったと思う。筆者による徳島新聞への投稿記事、鑑賞プログラム「パオリーネ」を徳島でアレンジしたこども鑑賞クラブの記事、7月21日の報告会のチラシは、英訳してドイツの関係者に読んでもらった。

クラウゼ氏はシュプレングル美術館のFacebookに活動の

様子を掲載した⁽⁶⁾。徳島新聞の記事などを同館のニューズレター類に紹介しようと働きかけてくれたがこれは実現しなかった。

ボテマ小学校の校長や担任教員と「音のかくれんぼ」の実践交換を約束したものの、残念ながら具体化まで手がまわらなかった。こちらから送った記事は校内に展示され地元の保護者やマスコミに大きな反響があったとのことである。



図 シュプレングル美術館のFacebookより

5 発信について

Webでの展開や、交流の経過自体の紹介など事前に構想した発信については手がつかなかった。実践分野のレポートであれば、進行形でいわばブログ風に紹介していくことも比較的たやすいと想定していた。けれども、いくつかの理由で執筆しづらい思いをした。一つは外遊レポートやドイツ事情紹介といった視察報告ではなく、鑑賞の授業など実践の中にとかし込む形で、交流への関心をひろめていきたいという自分なりの課題を設定したのだが、これはやや思いが先走り足を引っ張った面がある。講師自身が身をゆだねていく、人同士の関係づくりと呼べるようなワークショップの実践を通して語るのがもっとも似つかわしいと現在は考えているが、それは帰国後1年の活動を通して徐々に確信を持つにいたったことである。

いま一つは、この交流事業という業務が、美術教育分野の学術的な関心だけで試行錯誤や基礎研究として取り組むにはなじみにくく、県をあげての国際交流の成果としてアピー

ルべきという点である。これは自明のこととはいえ、自分の取り組みの実感の部分に公にわかりやすく情報化していく手腕の不足を痛切に感じているところである。また同じような理由から、日頃の学校教育との連携事業の中で発信していくことも今後の課題となっている。徳島新聞に紀行文を投稿する機会を得たが、その中で教員に向けてのメッセージを強調したつもりである⁽⁷⁾。

6 考察

派遣のねらいとして、人的交流の観点では多文化社会への対応などの学芸員の資質向上を、また具体的な研究課題としては異文化での教育プログラムの実践を構想した。日頃していることを通して体験的に出会ったことは、実践的な知恵と結びつけやすいという考えによる。

「5-5事後の展開等―発信について」で述べたように、発信や徳島での学校への働きかけについては課題として残っている。また博物館施設のディスプレイ・デザインに関しても興味深いものを感じたがこのことについては継続して調査してみたい⁽⁸⁾。

コミュニケーション

本稿「4 活動」に紹介した通り、鑑賞者の主体的な学びを引き出そうとする当館のプログラムの実践は言葉の壁、また指導者と学習者の関係づくりの作法の違いをもこえて、好意的な反応を得ることができた。一方で、異文化の中で講師を経験した立場から振り返ると、子どもたちへの問い掛けは常に質問になってしまい、ドイツの子どもたちがひとりでの発言したくなるような対話の手腕不足、対話のスタイルの違いを痛感している。

ハノーファーでは、パートナーであったクラウゼ氏や通訳者のトイフェート氏をはじめ、共に活動した学校教員や美術館の受付スタッフにいたるまで、「その場にいる人が主役である」といった、構えずのびのびした雰囲気刺激された。直面する事柄について、その場で答えどころか問い自体を作っていくことを好むように見受けられる、ハノーファーの大人や子どもの持つ態度は、筆者のこれまでの価値観、職業意識をも強く揺さぶるものだった。筆者はドイツ語も話せないし、そもそもドイツの美術や文化に親しむ経験には

とぼしかったが、あたかも旧知の間柄のような強い印象を今は彼の地の人たちに対して抱いている。

その原因は端的に言って、自分の居場所を実感できたことにあるのではないかと考えている。人を活かすというと、大きな裁量や活躍の機会が特別に与えられる状態を連想しがちだが、筆者がハノーファーで感じた活かし方は少し違うように思う。例えばことばがうまく話せない人、事情をよく理解していない人、職務上の権限が大きい人、そうした立場の人が自分の属性をマイナスイメージでとらえているように見えないのだ。異なる立場の人同士が、お互いの属性をそのままに関係づくりに入っていく様子をいくたびも感じた。ドイツは今移民対策に直面しており、美術館におけるマイノリティ対策の必要性を問えばクラウゼ氏も筆者に同意していたが、その前提は徳島とハノーファーでは違いがあるように思われた。あくまで感触程度の話ではあるが、この点の認識を得たことは収穫であったと思う。

筆者は偶然だが今年度、ドイツ派遣の事業と並行して、同じく当館の教育事業に従事する亀井幸子主任の立案による、聴覚障がい者と活動する「みんなが楽しめる美術館づくり」事業や、保育所の3歳から5歳の子どもたちと活動する「アートの日」事業に参加しながら、自明と考えていた学芸員と来館者とのコミュニケーションをあらためて問い直す経験を重ねてきた。その際、ドイツでの「外国人」体験が大いに参考になっていることは言うまでもない。またこれらの経験は、2008年から続けているゲールツ三隅友子教授との日本語教育に関する協働研究の観点に加えていくことができると思う。

プログラム

手慣れたプログラムを使ったことについても手応えがあった。「音のかくれんぼ」を通して、オノマトペに関する情報交換が盛り上がるような場面はやはりなかったが、それでもドイツ語クラスの中学生たちは口で音をたてたり、言葉で言い当てたりしてよく反応していたし、ボテマ・シューレの小学校4年生や先生方も筆者の投げかける日本語のオノマトペに対して、詩的な説明や絵の解釈を活発に返してくれた。例えば言語学的な観点でデータ採取を優先するような活動にできなかったからこそよい面もあったと考えている。

また「勝手にしんさいん」はクラウゼ氏が高く評価し、同

僚たちと何度も実践してくれたようである。もともと鑑賞者の勝手な言い分を引き出すというゲームではあるが、ドイツの子どもとエドゥケーターたちが、さらに自在な発想で賞を話し合っている様子は想像に難くない。自館において経験豊富な題材による交流の構想は、十分な成果をもたらしたと思う。

学び

当館のスタッフを研修に迎えたいという、プラート学芸員の2年前の提言をきっかけとしながらも、ただ見学や視察に終わりたくないと考え、徳島側のプログラムを持ち込むことを発案した。しかし「その場にいる人が主役である」、「問い自体を自分でつくる」といったハノーファーで肌で感じた感覚をもし事前に理解できていたなら、それは取り越し苦労であったと言えるのかも知れない。ただの客人として授業を傍観させるような受け身の研修を、ドイツ側のスタッフが組むとは思えないのだ。結果的に筆者は自分が抱いていたような研修観、あるいはもてなしの概念といったことを大きく変えることになった。研修を受ける側の能動的な役割と価値を、導く側も応える側も双方に実感できるような関係性を様々な場面で追求していきたい。それはやはりドイツとの交流を通して学ぶことができたのだと考えている。

註

- (1) 州都ハノーファー市にあるシュブレンゲル美術館は1979年開館。20世紀美術のコレクションで知られる、ドイツを代表する美術館。開館当初から美術教育の分野でも先進的に活動。
- (2) 2011年にはシュブレンゲル美術館の学芸員らが徳島県を訪問し当館の視察も行った。
- (3) ニーダーザクセン州首相府のマティアス・ヒルシュフェルド氏によれば一案として2012年の「メイド・イン・ジャーマニー」展の開催時期に合わせての訪独を通して、例えば若手芸術家との交流が発展することを期待していたようだ(4月19日の会談。筆者聞き取り)。当館では同年度内の展覧会業務等の分担がすでに動き出しており、日程が自由にならなかったこともあって2013年4月の実施となった。
- (4) ラートマン氏、三隅氏の助言。
- (5) シュブレンゲル美術館の体制はザント氏によれば、現在7名の学芸員と若干名の非常勤スタッフで調査研究業務をこなしており、教育・コミュニケーション部門のザント氏のもと約10名の契約エドゥケーターが学校からの来訪に対応している。4月の予定表には連日3、4組の学校が2時間半程度の予約を入れていた。後になって聞いた話だが、竹内とペアで活動したクラウゼ氏は

は教育の専門のほかにデザインと演劇の実践を得意とする人で、筆者の日頃の関心と共感する場面も多々あった。ザント氏によれば楽しい授業づくりを得意とするクラウゼ氏を選んだそうだが、実際今回の活動は彼女の行動力に助けられた。

- (6) シュブレンゲル美術館フェイスブック 2013年4月22日
タケと「ヤッピーネ」ー国際的な美術教育。2013年4月16日－18日
「タケと申します」と書いたプレートと、竹内利夫さんが小学生に笑顔で見せます。徳島県立近代美術館で学芸員、美術教育スタッフとして働いています。
教育・コミュニケーション部での3日間の集中的なメソッドの交流。何よりの成果は、美術館に住む幽霊「ヤッピーネ」が徳島に「誕生した」こと。この名前はヨハナ・フリーゼン小学校の2年生がつけたのですが、それは竹内さんがシュブレンゲル美術館に訪れた子どもたちと一緒に、美術館の幽霊バオリーネと出会ったことから生まれました。
私たちもまたタケさんから学びました。子ども審査員に絵の賞をプレゼントさせるといふ、クリエイティブな達人です。月曜日にはボテマ小学校へ訪問した後、我らが日本人ゲストはたくさんの思い出、そして写真にある怪物の絵(4年生のジョン作)をたずさえ帰路につきます。
ありがと、タケさん！
ニーダーザクセン州文部科学省の助成によるものです。
写真：カティア・クラウゼ
(筆者訳)
- (7) ニーダーザクセン州政府ヒルシュフェルド氏からは、組織の枠にこだわらず今回の経験を学校の生徒や教員につなぐことが大切だと助言を受けた。しかし実際に学校現場のニーズに即して協働を持ちかけていくには慎重が必要だと感じている。
- (8) アウグスト・ケストナー博物館の常設展示におけるデザイン教育の教材類や、企画展「フード・デザイン」のディスプレイ、サイン類、また近年改装された州立博物館のジオラマ展示やサイン類を見ると、研究者とデザイナーが具体的な教育効果に関して念入りに対話を深めて制作されていることが一目瞭然であり、その強い論理性と明解さに感嘆した。一般に美術館の分野では作品自体をみせることが主な関心であり、展示具は後回しになるきらいがあるが、展示行為自体の論理性という点で、日独の美術館、博物館が意見交流することには、可能性があるように思う。

たけうち としお(徳島県立近代美術館上席学芸員)

contents

The workshop experiential in Surréalisme Exhibition
-Collaboration with the school and museum-

3

Shinichi Tomoi, Sachiko Kamei

Report of activities : Exchange of art appreciation
programmes between Sprengel Museum Hannover
and Tokushima Modern Art Museum

31

Toshio Takeuchi

Kokki Miyake's Paintings and His Life (4) - from Shobikan
private art school days in the Meiji era to the years
of his first visit to America

3

Yoshinori Mori

徳島県立近代美術館
研究紀要第15号

発行
2014年3月28日

編集
徳島県立近代美術館
770-8070 徳島市八万町向寺山
文化の森総合公園
telephone : 088-668-1088

印刷
株式会社教育出版センター

この印刷物はグリーン購入法適合製品
を使用しています。

The Bulletin of
The Tokushima
Modern Art Museum No.15

©2014 by
The Tokushima
Modern Art Museum
Bunkanomori-Sogokoen.
Mukoterayama,
Hachiman-cho,
Tokushima-shi, 770-8070
Japan
telephone : 088-668-1088

printed by Education
Publishing Center

printed in Japan